

<p>平成30年 9月27日</p>	<h1>病害虫発生予報</h1> <h2>10月号</h2>	<p>茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会</p>
------------------------	--------------------------------	--------------------------------

イネ縞葉枯病対策のため、水稻の収穫後はすみやかに耕起し、
再生稲（ひこばえ）をすき込みましょう！

＜ 目 次 ＞

<h3>I. 今月の予報</h3>	
<p>【注意すべき病害虫】</p>	
<p>共通害虫：ハスモンヨトウ，オオタバコガ</p>	<p>..... 1</p>
<p>【その他の病害虫】</p>	
<p>ナシ，ブドウ，イチゴ，促成トマト，秋冬ハクサイ，冬レタス，秋冬ネギ</p>	<p>..... 2</p>
<p>【防除所レポート】</p>	
<p>平成30年の水稻における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応</p>	<p>..... 3</p>
<h3>II. 今月の気象予報</h3> <p>..... 5</p>	

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/>
フェロモントラップデータ随時更新中

<HP QR コード>



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

共通害虫

1. ハスモンヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間（8月16日～9月15日）のフェロモントラップへの誘殺数は、龍ヶ崎市で平年より多く、鉾田市および土浦市で平年よりやや多く、笠間市および筑西市で平年並である。
- ② 9月下旬現在、大豆の一部圃場で発生を確認している。

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ② 圃場をよく観察し、若齢幼虫の集団の早期発見に努める。幼虫が中齢以上になって分散して食害するようになると、被害量が増大するだけでなく、薬剤の効果も低くなるため、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、定植時および結球始期の防除を徹底する。

2. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間（8月16日～9月15日）のフェロモントラップへの誘殺数は、笠間市で平年より多く、坂東市で平年よりやや多く、筑西市で平年並～やや多く、水戸市および龍ヶ崎市で平年並、土浦市で平年よりやや少なく、古河市で平年より少ない。
- ② 9月現在、大豆、抑制トマトおよび夏秋ナスの一部圃場で発生を確認している。

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培ではハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ② 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。なお、防除適期はフェロモントラップへの誘殺数が増加したときなので、誘殺状況（病害虫防除所ホームページ）を参考にする。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、定植時および結球始期の防除を徹底する。
- ⑤ トマト、ピーマン等では収穫終期まで加害が続くので、発生しているハウスでは防除を徹底する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況および注意すべき事項
ナシ	黒星病	発生量：－	9月下旬現在，葉における発生は平年よりやや多い。落葉前の秋季防除を徹底する。罹病葉は翌年の伝染源となるので，落葉を適切に処理する。
	ハダニ類	発生量：－	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。多発している圃場では，秋季，休眠期および翌春の防除を徹底する。
ブドウ	べと病	発生量：－	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。落葉前の秋季防除を徹底する。罹病葉は翌年の伝染源となるので，落葉を適切に処理する。
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	炭疽病		
	ハダニ類		
促成トマト	黄化葉巻病	発生量：－	9月上旬現在，抑制トマトにおいて平年よりやや多い発生である。媒介虫であるタバココナジラミの防除対策等を徹底する。
秋冬ハクサイ	軟腐病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。台風等の強風を伴う降雨の後には，防除を徹底する。
	べと病		9月下旬現在，平年並の発生である。
	ハイマダラノメイガ	発生量：平年並～やや多い	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
冬レタス	菌核病	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
秋冬ネギ	ネギアザミウマ	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。

平成 30 年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応

県内の調査圃場（57 圃場）等の調査結果をもとに、本年の水稲における主要病害虫の発生経過と年次推移、さらに、次作に向けた対応についてまとめましたので、参考にしてください。

1. いもち病

前年の籾や被害わらで越冬して伝染源となり、低温・日照不足・多湿等の気象条件で発生が助長される病害である。葉いもちは例年梅雨入り後の 6 月下旬から発生し始め、7 月に最も発生が多くなる。その後、出穂期頃に降雨が続くと、穂いもちが多発生する。

[本年の発生経過]

葉いもち感染好適条件（BLASTAM*による）は、6 月上旬中に県下全域において出現したが、6 月後半からほとんど出現せず、葉いもちの発生は、平年よりやや少ない～少なく推移した。出穂期にあたる 7 月下旬以降は平年より日照時間が多く、穂いもちの発生は 8 月下旬で平年よりやや少なく、9 月上旬で平年並～やや少なかった。

*BLASTAM（ブラスタム）：気象条件から葉いもちの感染好適日を判定するプログラム。

[次作に向けた対応]

- ① 種子は必ず更新し、未消毒の種子を使用する場合は種子消毒を行う。
- ② 常発地では育苗箱施用剤を使用する。

2. 縞葉枯病

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。ヒメトビウンカの幼虫はイネ科雑草で越冬し、4 月上旬頃に羽化して麦畑へ移動、増殖した後、6 月上旬頃に成虫が本田に飛来する。水稲は、イネ縞葉枯ウイルスを保有したヒメトビウンカに吸汁されるとウイルスに感染・発病する。

[本年の発生状況と年次推移]

県内全域で本病の発生を確認し、発生程度は引き続き高い傾向であった。8 月上旬における全県の発病株率（図 1）は本年を含む過去 11 年中で 1 位、発生地点率（図 2）は本年を含む過去 11 年中で 2 位であった。

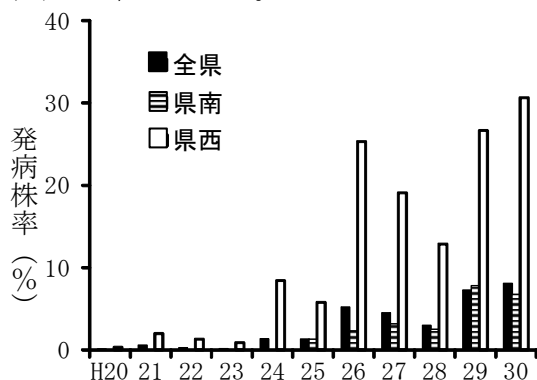


図 1 全県、県南および県西地域におけるイネ縞葉枯病の発病株率の年次推移（8月上旬）

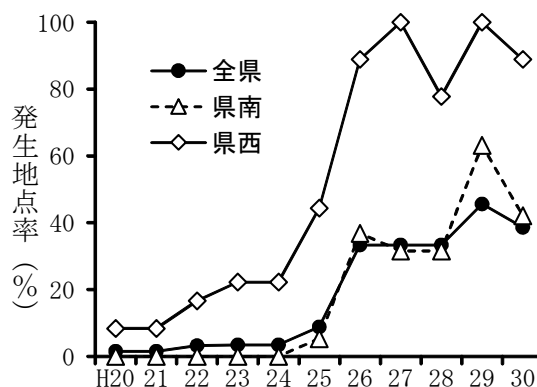


図 2 全県、県南および県西地域におけるイネ縞葉枯病の発生地点率の年次推移（8月上旬）

[次作に向けた対応]

- ① ウイルスを保有したヒメトビウンカが翌年の感染源となる。越冬するヒメトビウンカの生息密度を低減させるため、収穫後すみやかに耕起するとともに、越冬場所となる畦畔等のイネ科雑草の除草を徹底する。
- ② 発生の多かった地域では、育苗箱施用剤を使用するとともに、本田防除の実施を検討する。また、縞葉枯病抵抗性品種の導入を検討する。

3. 紋枯病

前年の被害株や畦畔等の罹病雑草に形成された菌核で越冬し、伝染源となる。菌核は代かき時に水面に浮上し、株元に漂着する。気温が上昇し、株間の湿度が高くなると、菌核から発芽した菌糸が伸長して葉鞘内に侵入し始め、楕円形病斑をつくる。

[本年の発生経過]

7月中旬に発生を確認した後、7,8月の気温が平年より高く推移したため、8月上旬、下旬には県内の広い範囲で認められ、平年より多い発生であった。(図3, 4)

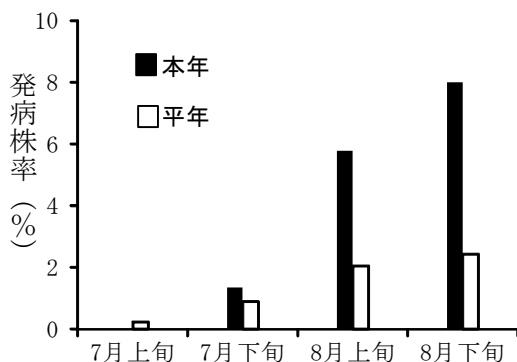


図3 平成30年の紋枯病の発病株率の推移

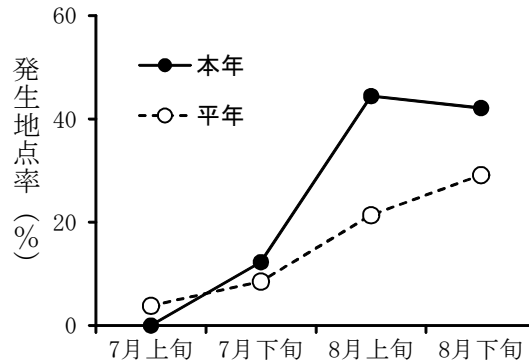


図4 平成30年の紋枯病の発生地点率の推移

[次作に向けた対応]

- ① 代かき時の浮遊物に菌核が混入しているので、畦畔沿いにたまったごみを取り除く。
- ② 常発地では育苗箱施用剤を使用する。
- ③ 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。

4. 斑点米カメムシ類 (クモヘリカメムシ等)

成虫は、水稻の出穂前は畦畔や周辺のイネ科雑草地に生息する。出穂とともに水田に侵入し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。孵化した幼虫も同様に収穫期まで穂を加害する。本県の主な発生種はクモヘリカメムシである。

[本年の発生経過]

7月上旬まで平年並~やや少ない発生であったが、7月下旬の発生が平年より多かつたため、7月31日に注意報を発表した。8月上旬の発生は平年よりやや多く、下旬は平年並であった。

[次作に向けた対応]

- ① 水田内外のイネ科雑草の除草に努める。ただし、水田周辺の除草は水稻の出穂期近くに行くと、斑点米カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、出穂期2週間前までに終わらせる。
- ② 幼虫を対象とした防除適期は出穂10~15日後頃(乳熟期)である。
- ③ 多発した場合は、②の時期に先立ち、穂揃期に成虫を対象とした防除を実施する。

5. イネツトムシ (イチモンジセセリ)

通常、年3回発生し、7月下旬から8月上旬に発生する第2世代幼虫の被害が大きい。葉をつづり合わせてツト(巣)をつくり、出穂を妨げる。葉色が濃い水田で発生が多い。冬は幼虫がイネ科雑草内で越冬する。

[本年の発生経過]

7月上旬の発生は平年並であったが、7月下旬から8月上旬にかけて平年より多く発生した。

[次作に向けた対応]

- ① 水田をよく観察し、幼虫が小さいうち(葉先が巻かれ始める時期)に防除を実施する。
- ② 晩生品種の作付、遅植え、多肥等によって葉色が濃い水田では、特に発生に注意する。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 9月29日から10月28日)

気象庁(9月27日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	10	40	50
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

<1週目の予報> 9月29日(土曜日)から10月5日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

<2週目の予報> 10月6日(土曜日)から10月12日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

<3週目から4週目の予報> 10月13日(土曜日)から10月26日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類^{*}(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病虫害発生予報5月号(平成30年4月26日発表)の防除所レポート参照

- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。